

特 110

845



始



特110

845



佐川流霞

大正
5. 1. 11
内交

序

著者は、互に己を愛する如く人を愛しみ身を愛する如く自然をおもふ人である。かやうな著者の生活に、人と自然界は把握して密の様な観がある。不斷かの藝術は、眞實の二語をもつて貫ぬかれたる愛の一道であつて、人間無限の性格をただへてゐる。眞に流霞の藝術を愛するものは、流霞の性格を信ずる人であつて、眞に流霞の性格を愛し得る人は、流霞の藝術を信じ得る人であるの言ふ迄もない。

—自然と人生社同人—

自序

およそ短歌の價值は、理解になくして味到において満足さるる自己表現の如何に律せられる。自分において誤つた感じ、虚ろな思想、眞の性格から進ばしつたのでない表現を強ひてゐたごいふことを、自づから悟りながら敢てしてゐる、こんな創作者がよくある。かやうに自分で自分の權威を無視した遺方は既にほこんど生きた創作の命はないものであつて、つまり自分で自分の性格を殺した創作は、いかにうるはしい詞や句法の妙を盡してゐても、決して新時代の要求する藝術本能ぢやないご、私はかたくさう信じてゐる。

かつて私は、某歌人の「追憶」的の記述めいた歌集に接した

ことがあつた、それにはあらゆる社會問題も出てをれば、舊思想の壓迫も表はれてをり、からい生活難も記されてあつたので、仲々面白そうであつたが、その後いまに再讀しやうごは更におもはない。どうしたのであらうか、これに就いて自分は自分をあやしまない、もはや粗讀のうちに歌集の内容がもたらす了解的に達し得たので、全然社會問題の提供記述が、この歌集の動機であつたかのやうに思ふ。最近問題文藝なごが、藝界一部の人々に稱へられ出したさうであるが、この作者はたしかにその主張者であるか、さなくば而うした主義主張の渦に卷込まれた人で、もう自分で自分の生命を持ちあいた人の聲、何だかかやうな集には、そんな氣分が漂よふてゐはしまいか、私にはそんな創作者は、不熟な歌の墮落であつて、むしろ斯界に流行疫をかもす

恐ろしい分子だと言ひ得られる。全たく眞の自己即ち人間の性格能力を解しない人達ぢやないかと思つてもみる、なるほど人は社會の一分子、社會的の動物であるといふことは言へる、してそこに社會から受けるあらゆる方面の刺激を否まれないが、誰も己の生命といはうか必竟生きてゆく上には、自分の思想、感情まで、社會のものだとは言えますまい。そこにおもふ。あの遠い原始時代の人の周圍の刺激の稀薄な生活は、たしかに今の野心臭い裾けむりのなかに人間虚飾！かを何よりのモットーとした歌人よりは、ずつと眞面目な自然的な詩人の生活であつたらう、否むしろ赤裸々無垢であつたことを愛すると言ひたい。つまり人々によつて異なる生的本能の發揮即ちそこに生ずる個性の内在的統一がせびなくされる要求が歌を生む動機——かう

考へると、そこに人はいかなる世界にも抵抗し難たい懐かしさ、抑へがたい驚異の念が美化されるやうになる、そこに到つて藝術はめざめてくる。即ち自覺のなかに、うすら明るい光を見出さうとする、してその光によつて幾分か自分の生の満足を得やうとする、そこに眞を奥深く自己にもごめて自己に生きようとする——内的生命は、實に人間によつて始めて圓滿にうたはれ充實されてゆくものと信じなければならぬ

大正乙卯の末月

國府の里にて
著者 識

日
光

容 内

さ け び (39)	断 崖 の 上 (31)	小 情 小 景 (15)	日 光 (7)
------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	------------------------

しらじらと戸の隙洩れて朝あかり今は
さめつゝ蛙のなくも

ほのぼのさ山はさくらの疎ら咲き蛙な
く音に朝明けにけり

いつしらに山の木の芽のいぢらしう青
きが人の心そとるも

こんこんと山は垂水の音たてゝ人ゆく
白日の橋かかるみゆ

夕日に山はかぐるみ光りつゝ麓は麥
のしろき走り穂

しらじらとあかつき光り山あひのだん
だん坂をのぼりゆけるも

はつとして息吐くところ、しげり葉の峽^か
間へ人のいそぎゆく道

空の青ふかふかとしてほのびかり裸か
のまゝの山を歩むに

かがやかに朝日てる照る山あらは峽に
人ゆく路はしろしも

うらうらと日照る山坂、赤土の畑の麥
はしろく穂に出し

しらじらと日光こぼれて山峽の赤土み
ちの草のひかるも

● たねまき ●

さんらんと日光ひかりふりつとわが畑はたけ
は草の青う茂るも

塊くわいをわる吾もたのみて塊をわる、日光
ふり来よ種まく畑に

一握の種をにぎりて照りわたる日はた
ふとしや畑のうへに

うらうらと大空はれていまこゝに光り
こぼるゝ種を蒔くなり

畑なかに立ちて種まくひとり男おとこのから
だ赤しも日に照らされぬ

*

あかつきの畑はしろき朝風にいまは胡
瓜も芽をふかしつゝ

しらじらと日光こぼれて散るところ、
空に對ひて芽は伸びそめぬ

小情小景

一、
しのめのしらみこぼれて夏おは路囚
人馬車の駆けゆくが見ゆ

山あほみ天津ひかればすいすいと紺ねんの
つばくら空かへりくも

さんさんと大路は夏のひかりふり吾け
だものゝ喘ぐここちす

天つ空きらと光りてそびえつゝ火の見
はしどの鐘はちさしも

くわうとして街に日を照りゆきすりの
巡查おは路に靴をならせる

あをあをと天津ひかれはひやくかに鐵
道レールわが目にふると

空はれてたかしやたかし日の丸の旗が
ゆらめく夏の波止場に

青々と潮さし來れは古入江まつくろい
船はけむりを吐ける

二、

風たえず流るとらしも朱あけの葉のこぼれ
こぼれて踏みゆく峽路

すくすくと杉の大樹の奥深み夕ゆ日のく
れなわに息づくがみゆ

おほ空は蒼青にひかり我とみし峽路の
落葉かなしかりしも

冬の木の立枯れつづきとぼとぼと踏め
る山路の日のぬくさかな

ひるの日は枯草原の立枯れの木のでつ
べんに恍としてみゆ

くもり空にちりん小いさくかゝりわて
磧かはらのみづのたのみともなさ

ざくざくと踏みゆく河原しきたへ砂
は人のかなしきものを

ゆきくれて河原のつつみ白き穂の芒に
頬を埋めておもひぬ

穂すゝきの穂に出て山の一すぢの朱土
みちは光るなりけり

ろら晴れて岳を下りつゝ白妙しらたへの峽の河
原をみはらしにける

兵隊がづらりとならび練兵の秋の草場
は黄にひかるみゆ

秋日和からだに熱を感じつゝすごやか
なれとおもひぬ草場に

まつさをに光るがゆえに天つ空こゑひ
ろめつと鳥とびゆくも

木にとまり何をなく鳥うすく濃く巷の
空は夕映ぬつとも

河がらす何をなくかや、ほの白う夜明
の水は流れゆけるも

しらじらとあかつきびかり硝子戸にひ
びいて今朝けさの汽笛きさなりをり

*

しらじらと蕎麥そばの花こそ咲きにけれ、
ひとり堤つとみに懐ろ手する

この男何をおもふや秋霧につつみを踏
めるころもとなさ

ちんちろり厨くりやに鳴けばかへりきて夕飯
をくふ心うれしも

立枯れの河原くぬぎのしるひかりはろ
ばろとして空はれしかも

秋の雨しみじみとして渚のあけの河原
いさをを濡らしゆく見ゆ

秋の日はすみとほりつく水底におほき
岩しづみ光りをるみゆ

黄に枯れし岳の頂だきちつと見てはや
かりそめの命のなみだども

丸太木の流れゆくまゝたうたうと鮎喰
川の北へとすめる

しづしづと峽を落ちゆく筏ふね夕日の
紅殻色ベニガッにそみつゝ哀れ

ふつとみし草の黄いろき生きものゝ生いぢ
のいのちのいさはしさよな

抜きとりし稻穂のあかさ山にきて人の
真面目のおもはれにけり

夕つ日がかつと明かるく頬に照れば蜻とん
蛉はついつい飛びてやまずも

生きものゝ人のおろかさ秋の日の汽車
の窓よりつくづくとみる

あき時雨しぐれ

山の小さいさき頂だきに

ないて鳥の臥ねにかへる見ゆ

たそがれてみ山かぐるみゆく人の見ゆ

ねば細の梢さぶしも

断崖の上

●あらし●

むれたてる木々の青さよ、渦巻いて嵐
吹きゆく木々のあをさよ

あをあをを渦巻いてゆく地の上の嵐の
なかの木々のあはれさ

人間ら家にこもらひ夜をこめて嵐はい
よと海のごとしも

*

かにかくに生きてゆかばやかく思ひ秋
のみ空を仰ぐなりしも

*

暴風雨のあと、ひとりつくづく青の葉
を踏めば涙のわく朝あしたかな

すがすがと日てり畑の植ゑ物のしひた
げられし匂ひのするも

かつとてり朝の日輪さしのぼる嵐のあ
との木のしなやかさ

風過ぎてひとかに空けひかりつく屋根
つくろへる人はかなしも

ほのあかみこ青の空にゆれわつく黎明
のもみぢぞ骨あらはなる

しらじらと秋の洪水退き川端の草の青
さがもまれてゐるも

●まりぎし●

夕ゆふつ日がかつとまつ樹にさしかかり人
は小さしも断崖きりぎしふめる

血のごとき夕日に染みて辿りゆくこの
断崖の並木のあかさ

秋の風まともに起たちてわれとわがたの
む心ぞあはれ断崖

杳そうとして夕日のひかり断崖をうつむい
てゆく前に後ろに

たれこめておよめる山路風たちて草す
がやかに光りをるみゆ

あなたふと如來のひかり斷崖を歩める
人の小さいさきからだに

風過ぎて天津ひかれればおしなべてこの
中空を戀ひしとぞおもふ

さ
け
び
(舊作)

●小松島●

ふと昨きののわれにまた遇ふなつかしさ、
渚の松に潮しほの香をかぐ

しのびしのび胸こゝろいためてわがかへる渚
の松にかよふ潮かせ

ふと肺うづの破れもうれししみじみと潮の
香がしむ松間をゆけば

風かぜはてし海の青さにわびてをりわれ
みづからを悔ゆる心か

とぼとぼと秋の潮風わがくれば蟲のこ
とくもいたはられたり

●熱血篇●

青空、青空、ほしひまくにぞわがまま
の心がゆきて生いけを願へる

つくづくとうち頭垂うなれて、直立すたの晝も
あかるき樹の蔭をゆく

あをやかにみ空はれつとさみしさや生
の血潮みの體みにたざりくる

みどりふける直立の杜のあらはにぞ！
生の命をいつくしみつと

*

めざめたるまくにひそかに目をつむり
あよとばかりに夜は明くることも

醒まさるればさびしやわけに生活する
人の叫びの空にひびきて

つまらない！死んでしまへと職業の端
をこらへてなんだくめども

あきらめの心そくりつあかあかと陽は
ひんがしの峯に燃ゆる燃ゆる

青樹陰ひそりわが生をさびしめば太陽
はしんしんと降りてやまなく

あかあかと太陽ぞ照りゐたれ青夏の樹
陰をふめる我れも生もの

野は夕日、夏の晝寢のわがさめし足に
力を踏みしむれども

けふも暮れひと窓に居倚れば疲れはて
し眸めにかなしくも黙せる青樹

灯ともしひとつ赤うともりてこの家に胸ぬち
暗く暮れつとぞをる

春の嵐なほ吹きやまき暮れてゆく部屋
にしみじみ灯ひをこもしをり

戸を閉せばさびしさの身にたへがたく
遠田のかはづ枕にひびく

―街上の秋―

大日輪おほぬちのかつと生れ出てひんがしの黎しん
明めの街を急ぐなりけれ

ひそひそとあきうご姿われにみて秋さ
とがはのれいろうたるも

わがはだのかぐるみ光りうれしくぞ橋
ゆく人の古^{ふる}寂^{さび}ひてみゆ

空たかみ秋のしみじみ風見えてわれな
りはひの街に喘ぐも

陽のいろに命をみつゝなげきつも暮れ
なむ街は秋のかせ吹き

まづしさにひつたりと命抱きしめて街
の秋^{たか}空^かゆく風のおをきも

木かけさやに落ちたれ、ここの地の匂
ひ秋をよるほひ吾等ふめりさ

ひかり終

大正四年十二月廿五日印刷
大正五年一月一日發行

ひかり

著者 德島縣名東郡國府町大字觀音寺五二
佐川流霞

發行者 德島市通町二丁目
世渡谷市太郎

印刷者 德島縣德島市富田浦町千四百十六番地
嶋正太郎

印刷所 德島縣德島市富田浦町千三百廿四番地
一新印刷部

德島市通町二丁目

發行所 世渡谷書店



佐川流霞作

青人艸

壹部金貳錢

千早振み神かしこみ現身のおふぐ
眞に會へらく思へば

*

うら／＼ご日光みなぎりみんなみ
の天がしたくさそよぎあへるも

*

天が下ひかりたゞえて諸向にそよ
く青葉ぞうれかりける

*

みめぐみのひかりたゆたひよろこ
びに胸ふるはせて街を歩みぬ

世渡谷書店

終